

学部 4 年間を通じた地域協働教育が学生の意識に与えた変化

—高知大学地域協働学部第 1 期生パネル調査の結果から—

湊邦生・玉里恵美子・内田純一

(高知大学教育研究部総合科学系地域協働教育学部門)

Changes in Students' Attitude Promoted by Regional Collaborative Education throughout Four Years of Bachelor's Course

Kunio Minato, Emiko Tamazato and Junichi Uchida

Collaborative Community Studies Unit, Interdisciplinary Science Cluster, Research and Education Faculty, Kochi University

Abstract: This study examines the result of the panel survey on the first graduates of Kochi University Faculty of Regional Collaboration. The survey was conducted when the students entered the faculty, they became juniors, and just before they graduated the faculty, in order to clarify the change in the attitude toward the education the faculty offered. The main points of the finding are as follows. First, the students expected the learnings, curriculum and student life at the point of entrance, and were satisfied with the life and outcome of job hunting. Second, they became less confident of their regional collaboration management ability (RCMA) when they promoted to juniors, with little recovery at the point of graduation. Third, they do not only make stronger effort but also felt more fulfilled on practical classes than their research. Fourth, satisfaction with relations to faculty members strongly correlated to the students' self-image on their RCMA. Finally, the students' grade point average had strong correlation to satisfaction with class and relation to faculty members, as well as some aspects of self-image on their RCMA.

キーワード：地域協働学部、地域協働教育、地域協働マネジメント力、高知大学、地域志向

Keywords: Faculty of Regional Collaboration, Regional Collaborative Education, Regional Collaboration Management Ability, Kochi University, Community Orientation

はじめに

2015年4月に設立された高知大学地域協働学部（以下「本学部」）は2019年3月、学部開設から初めてとなる第1期生55名を卒業生として送り出した。この間、先例のない教育カリキュラムを実施する中で、学生の成長や反応を把握する必要があったことから、各年度の学生の入学時、第3学年進級時、卒業時の3時点で、学生に対する意識調査を行うこととした。調査は2015年4月、第1期生の入学時調査から始まっており、第1期生については、この程3時点での調査が完成した。

本稿では、この3時点での調査の結果について、卒業時調査の結果を中心に報告するものである。これまで筆者らは入学時調査の結果について、年度ごとの比較検討を重ねてきたが、同じ学生集団の変化を検討する試みは今回が初めてである。このような試みは、日本各地で行われているいわゆる「地域志向教育」の成果を検証する上でも参考となろう。

本稿の構成は以下の通りである。まず、1.では入学時・第3学年進級時、卒業時それぞれの調査の概要について紹介する。2と3は調査結果の報告である。2.では卒業時調査の各設問の集計結果を示す。その際、入学時・3年進級時のそれぞれの調査において、同じ内容の設問がある場合は、各時点の集計結果の比較を行う。3.では本学部での教育成果について検討する。そのために、地域協働マネジメント力の自己イメージに関する各設問への回答結果や、在学期間中のGPAに着目し、関連する要因について、簡単な分析を行う。4.ではこれらの結果から得られる示唆について考察する。以上の議論は5.でまとめられる。

1. 調査について

先述の通り、今回取り上げる調査結果は2015年度に入学した第1期生を対象にしたものである。調査はオリエンテーションの機会を利用して、集合調査法に基づく悉皆（全数）調査として実施した。まず、入学時調査は2015年4月の新生オリエンテーションにおいて、第1期生67名全員を対象に実施、全員から回答を得た²⁾。続く第3学年進級時調査（以下「3年次調査」）は2017年4月に開催された3年生オリエンテーションにて行ったが、それまでに原級留置で対象外となった学生が出たこと、また当日欠席者もいたことから、回答者は54名に減少した。そして卒業時調査は2019年2月に行った卒業生向けオリエンテーションにて実施し、回答者数は当日出席者37名となった。参考までに、第1表に回答者の基本属性として、性別、出身地（高知県内か県外か）および入学の際の入試方法を示す。

第1表 3調査の回答者の基本属性

性別	入学時		3年生		卒業時	
	N	%	N	%	N	%
男	22	32.8%	17	31.5%	11	29.7%
女	45	67.2%	37	68.5%	26	70.3%
合計	67	100.0%	54	100.0%	37	100.0%
県内者・県外者	入学時		3年生		卒業時	
	N	%	N	%	N	%
県内	17	25.4%	15	27.8%	8	21.6%
県外	50	74.6%	39	72.2%	29	78.4%
合計	67	100.0%	54	100.0%	37	100.0%
入試方法	入学時		3年生		卒業時	
	N	%	N	%	N	%
AO	16	23.9%	15	27.8%	9	24.3%
推薦	11	16.4%	11	20.4%	8	21.6%
一般	40	59.7%	28	51.9%	20	54.1%
合計	67	100.0%	54	100.0%	37	100.0%

なお、本稿では卒業時調査の結果報告が主となるため、集計結果についてはこちらに回答した37名すべてのデータを利用する。ただし、卒業時調査の回答者のうち、2名は3年次調査については回答していない。そのため、次章以降で異時点間の比較を行う際は、3回の調査全てに回答した35名のデータのみを用いることとする。

2. 集計結果および入学時・3年進級時調査との比較

2.1. 大学生生活でいちばん力を入れたこと

ここからは、卒業時調査の調査票で記載された順に、各設問の集計結果を紹介していく。以下、特に断りがない限り、問番号は卒業時調査でのものである。

まず、問1では大学生生活で一番力を入れたことは何か、択一式での質問を行っている。第2表は集計結果を示したものである。容易に想像される通り、最も多い回答は本学部がカリキュラムの軸に据える実習授業であった。また、クラブ・サークルや課外活動等、授業外での活動を挙げる回答も全体の30%を上回っている点も注目される。学生の中には、授業内外の課題といった負荷と折り合いをつけながら、自身の関心事を追求する者も少なからずいたことになる。ともすれば課題の多さや多忙さがクローズアップされがちな本学部であるだけに、この結果は注目に値しよう。反面、「知の統合」、すなわち実習授業を含めた各授業科目で得た学びのまとめとなるはずの研究科目に対して、回答が1件しかなかった点にも留意する必要がある。この点については後述する。

第2表 大学生生活でいちばん力を入れたこと

大学生生活でいちばん力を入れたこと	N	%
実習	15	42.9%
クラブ・サークル活動	7	20.0%
課外活動	4	11.4%
アルバイト	3	8.6%
就職活動	2	5.7%
その他	2	5.7%
研究	1	2.9%
友人関係	1	2.9%
合計	35	100.0%
エラー(回答過多)	2	
総計	37	

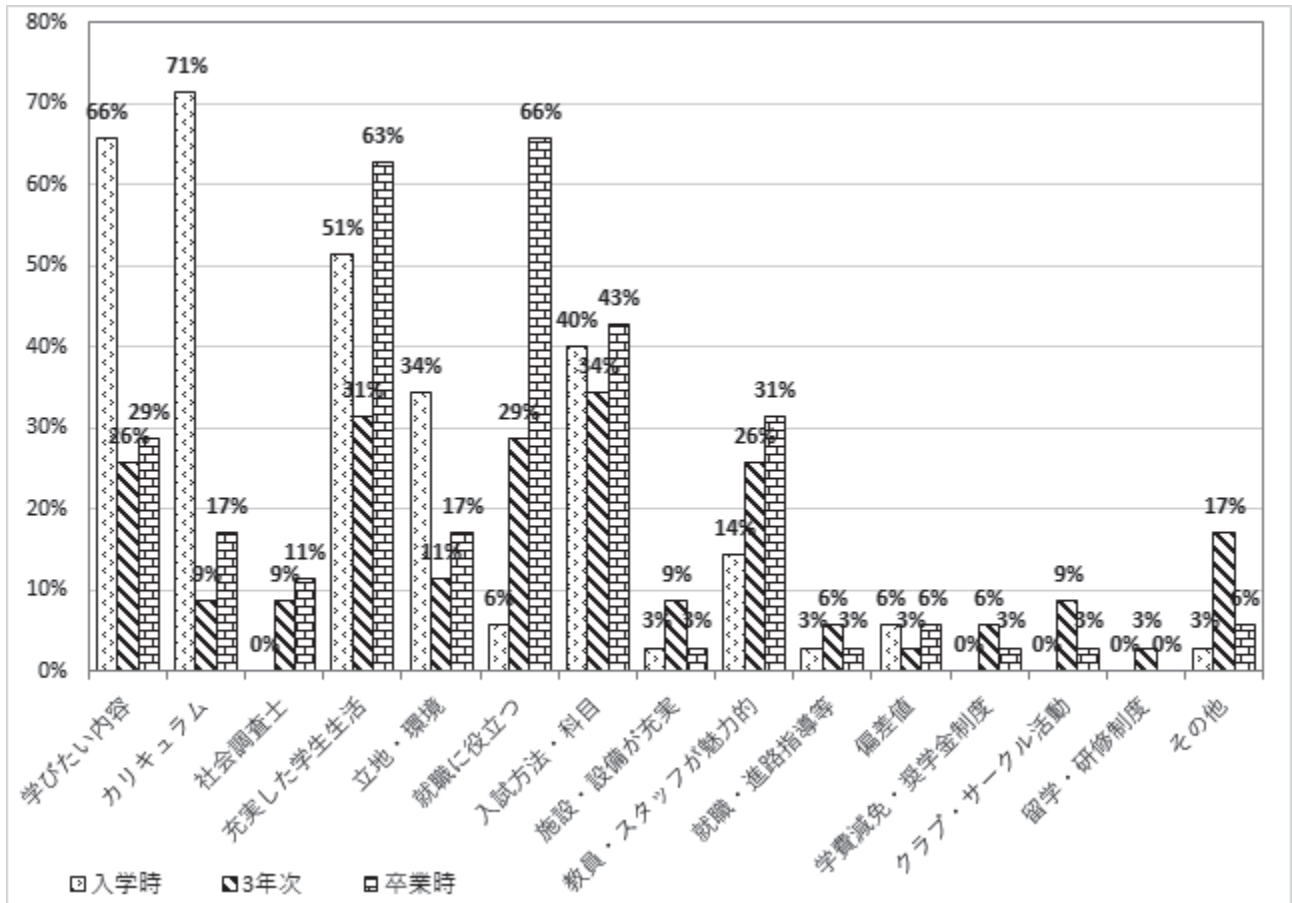
2.2. 地域協働学部への期待と入学後の実感

次に、回答者がどのような期待をもって本学部に入學したのか、また入学後に本学部の教育についてどのような実感を得たのかについて、卒業時調査の問2と、入学時調査および3年次調査の類似設問を基に検討する。

卒業時調査の問2は、「地域協働学部について、以下の中でもっともあてはまるもの3つに○印をつけてください」(太字は原文)という設問文で、回答者の本学部の教育に対する見方についてたずねている。また、関連する設問として、入学時調査では「地域協働学部を選んだ理由は何ですか。もっともあてはまるもの3つに○印をつけてください。」、3年次調査では「地域協働学部に入學して良かったと思うこととして、どのようなものがありますか。もっともあてはまるもの3つに○印をつけてください」(どちらも太字は原文)というものがある。これらは、調査時点に合わせて設問文の一部が変わっており、選択肢の文言も完全に同一ではない³⁾。そのため、厳格に考えれば比較可能性には留保がつくが、文言の相違にさえ注意すれば、入学から卒業までの大まかな傾向を見ることは可能であろう。

3時点での集計結果をまとめたものを第1図に示す。この図では、それぞれの選択肢を選んだ回答者が全回答者に占める割合をグラフにしている。図を見ると、入学時と卒業時で最も変動が大きいのが「カリキュラム」で、入学時には70%以上の回答者が選択していたのが、3年次では10%を下回るまで激減、その後卒業時調査では10%代後半となっている。

同様に、「学びたい内容」についても入学時の高い選択率が3年次に大幅に低下、卒業時調査で僅かながら上昇に転じている。逆に、「就職に役立つ」との理由は入学時調査ではほとんど選択されていないが、3年次、卒業時を通じてこの理由を挙げる回答者は大幅に増加している。また、率としては高いとはいえないが、「教員・スタッフが魅力的」という回答も、入学時から3年次、卒業時と増加を示している。



第1図 地域協働学部志望の背景と入学後の実感

注：％は対回答者数。回答件数は入学時 104 件、3 年次 79 件、卒業時 105 件。

これらの結果から判断する限り、本学部の教育の内容やカリキュラムについては、入学時に思い描いていたものとはギャップを感じつつも、自らの進路選択には役に立ったというのが、調査に参加した学生の大方の捉え方と言えよう。

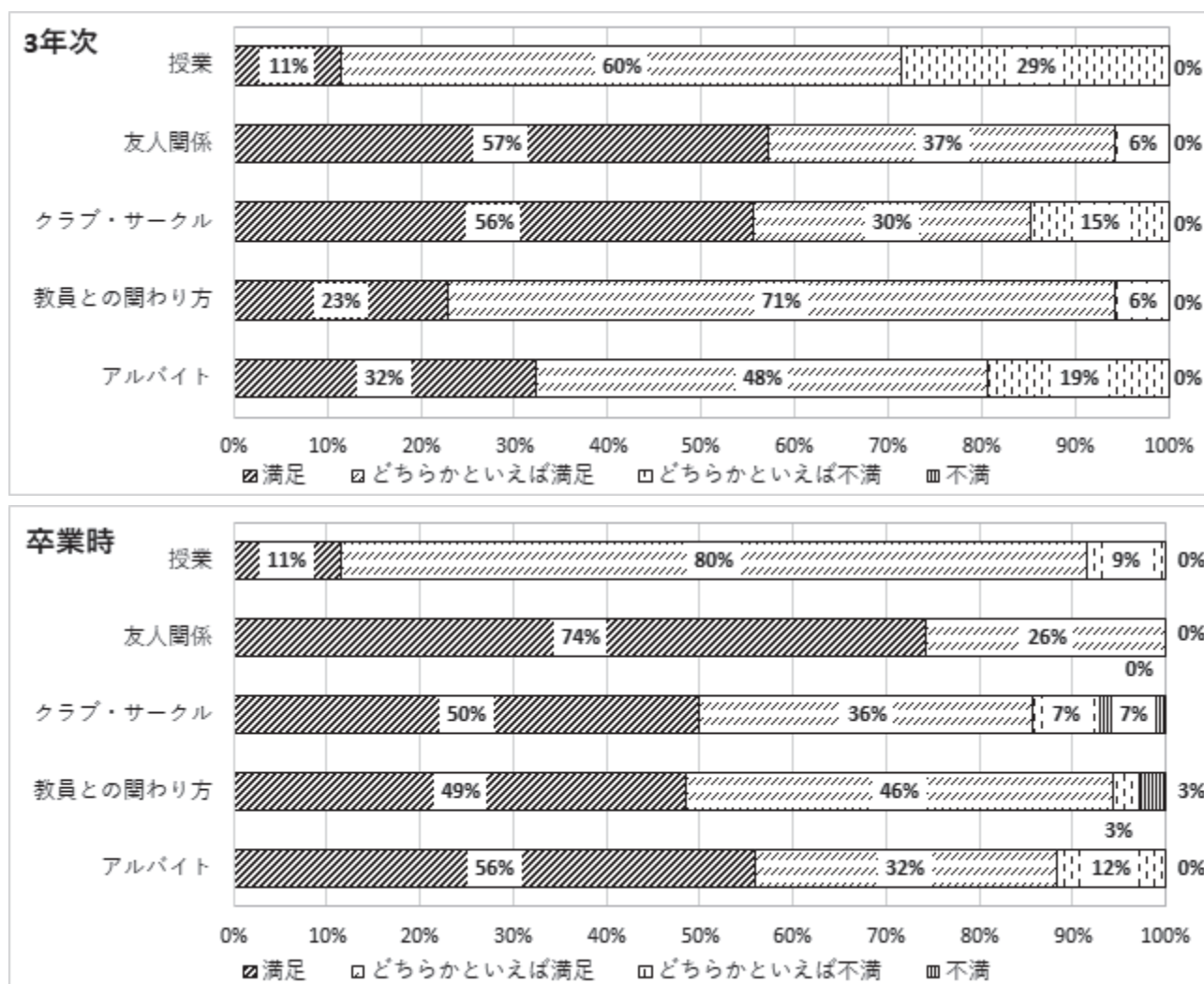
2.3. 学生生活への満足度

続く問3では、学生生活への満足度について、5つの項目に分けて訪ねている。この設問は3年次調査でもたずねているため、双方の調査結果と合わせた上で、第2図に示す。

明らかな改善がみられるのが「友人関係」「アルバイト」である。双方とも、「満足」「どちらかといえば満足」を合わせた肯定的な回答が卒業時調査において高まっており、「友人関係」については3年次調査で見られた「どちらかといえば不満」が卒業時調査ではなくなっている。「授業」については「満足」とする回答こそ比率が変わっていないものの、「どちらかといえば満足」との回答は20%増加している。

反面、「クラブ・サークル」「教員との関係」については、肯定的な回答と「どちらかといえば不満」「不満」を合わせた否定的な回答の比率自体は変わっていないものの、どちらも3年次調査で見られなかった「不満」が卒業時調査では現れている。特に、「クラブ・サークル」については肯定的な回答に占める「満足」が減少しており、満足度が総じて低下

していると判断できる。他方、「教員との関係」では「満足」が逆に増加しており、評価の分かれ方がより鮮明となった。



第2図 学生生活への満足度（3年次・卒業時）

2.4. 受講してよかった授業

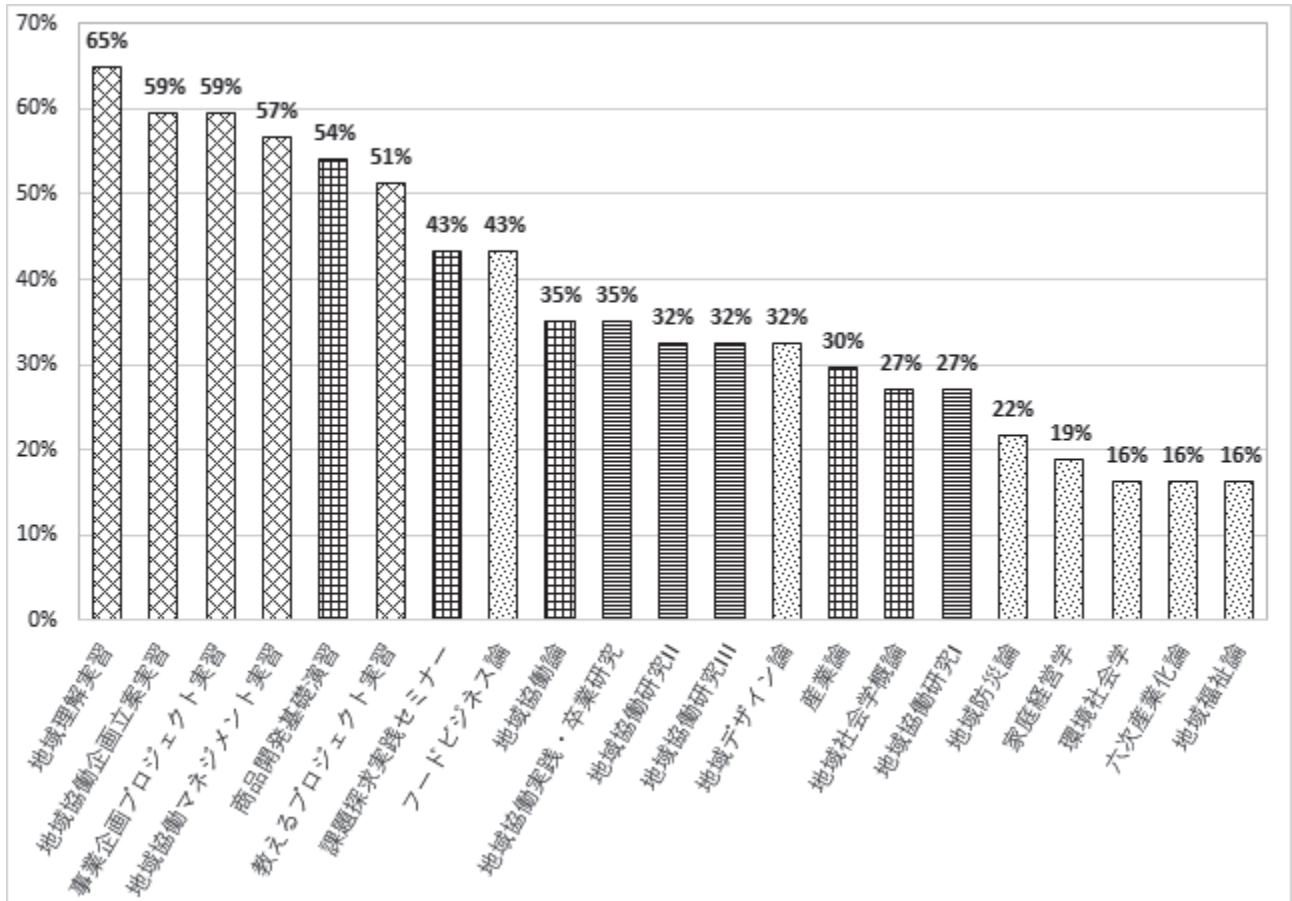
問4では、本学部が開講している授業のうち、実際に受講してよかったと思うものをすべて挙げるようたずねている。なお、この設問と同様のものとしては、入学時調査で受講してみたい授業についての設問をたずねているが、その設問では必修科目を選択肢に含めておらず、選択肢の構成が大きく異なることから、集計結果の異時点間比較は行わない。

この設問で選択肢に記載した科目数は60に及ぶうえ、選択科目の中には回答数が非常に少ないものも散見される。そこで、特に選択した回答者が多かった20科目について、集計結果を第3図に示す。

一見して明らかなのは、必修となる実習科目を選ぶ回答者の多さである。本学部では1年次から3年次まで、学期ごとに必修の実習科目を配しており、いずれの科目も回答者の過半数が「受講してよかった」として選択している。最も回答が多い「地域理解実習」は、本学部第1学年第2学期で必修の実習授業であり、以下第2学年第1学期必修の「地域協働企画立案実習」、第2学年第2学期必修の「事業企画プロジェクト実習」、第3学年第1学期必修の「地域協働マネジメント実習」、第3学年第2学期必修の「教えるプロジェクト実習」と続く。さらに、全学必修の初年次科目「課題探求実践セミナー」も、本学部では学内外での実習を主とする科目として第1学期に開講しており、いずれの実習授業も学生にとって満足できるものであったことが伺える。

その一方で、留意すべき事項として、学年ごとに研究活動と論文執筆を課す研究科目、すなわち地域協働研究 I, II, III

および地域協働実践・卒業研究は、実習科目と比較して選択率が明らかに低い点が挙げられる。この点については後に考察を加える。このほか、実習・研究以外の必修科目では商品開発基礎演習が、選択科目ではフードビジネス論の選択率が突出している。



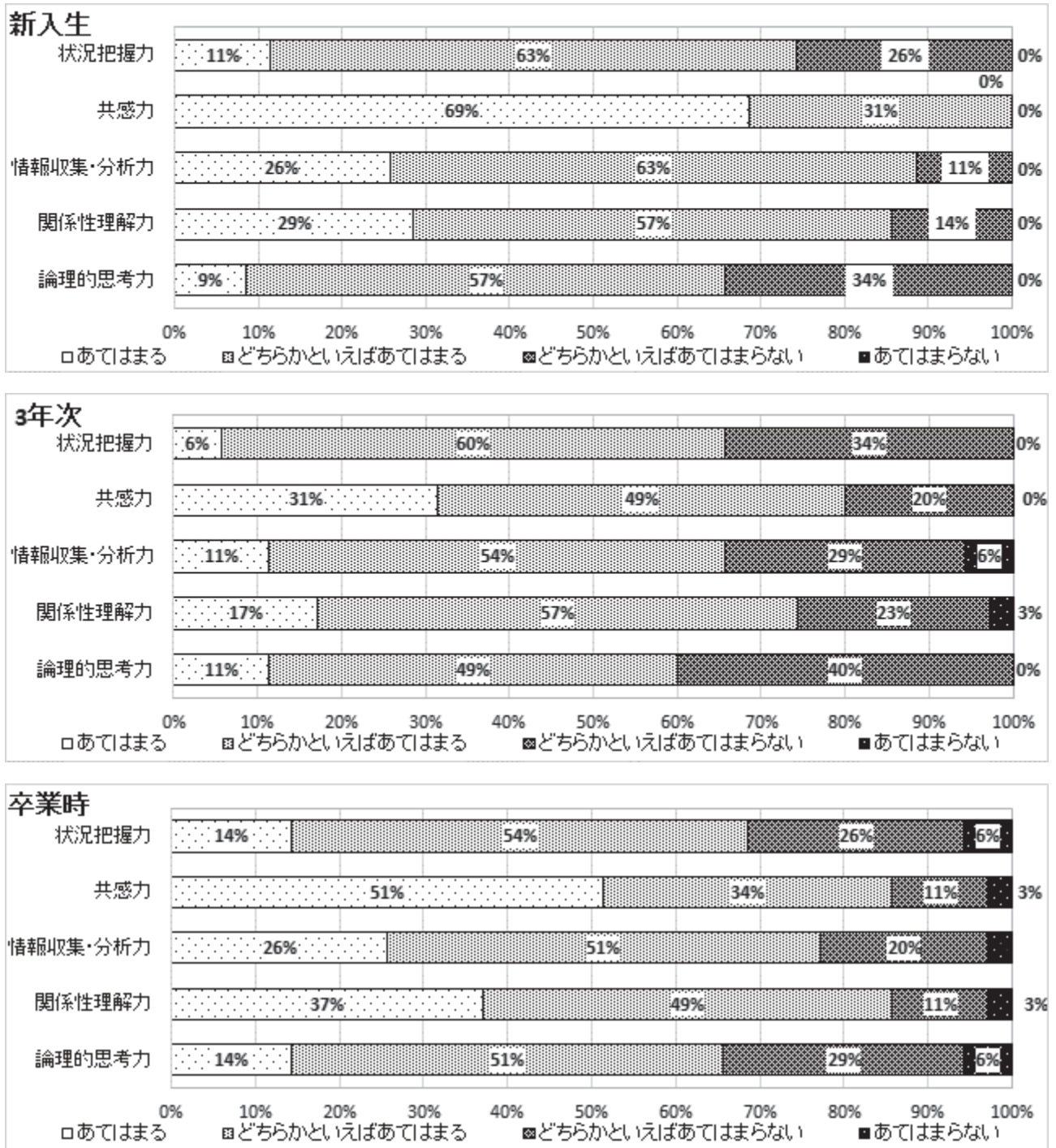
第3図 受講してよかった授業（上位20科目）

注：％は対回答者比。グラフのうち斜十字のものは必修の実習科目、横線のものは必修の演習科目、格子状のものは実習・演習以外の必修科目、紙吹雪状のものは選択ないし選択必修科目を示す。

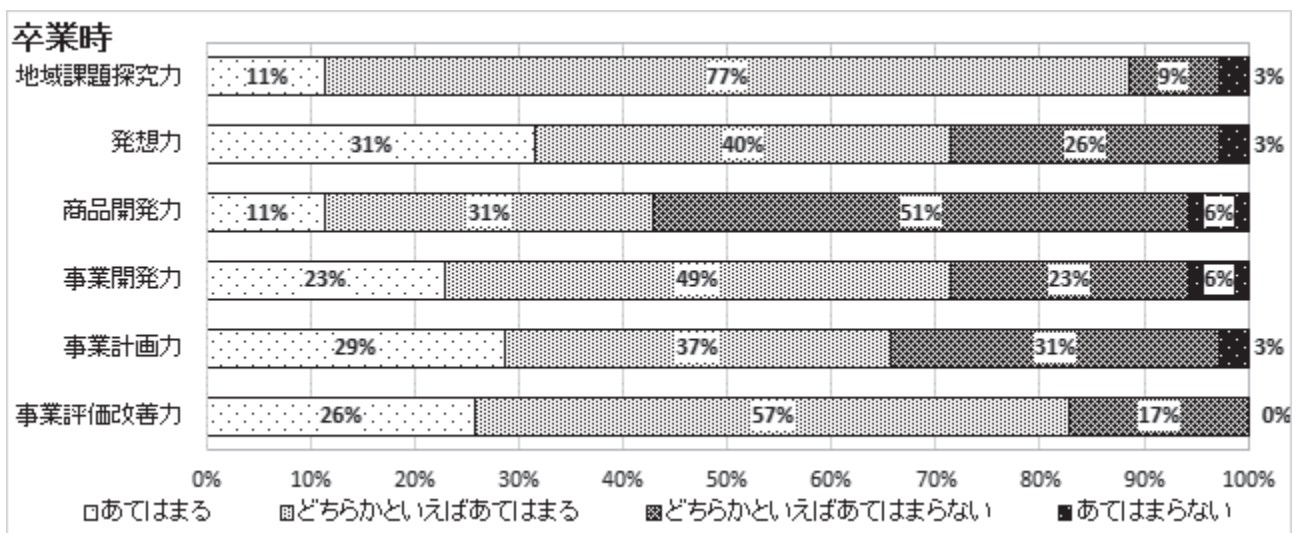
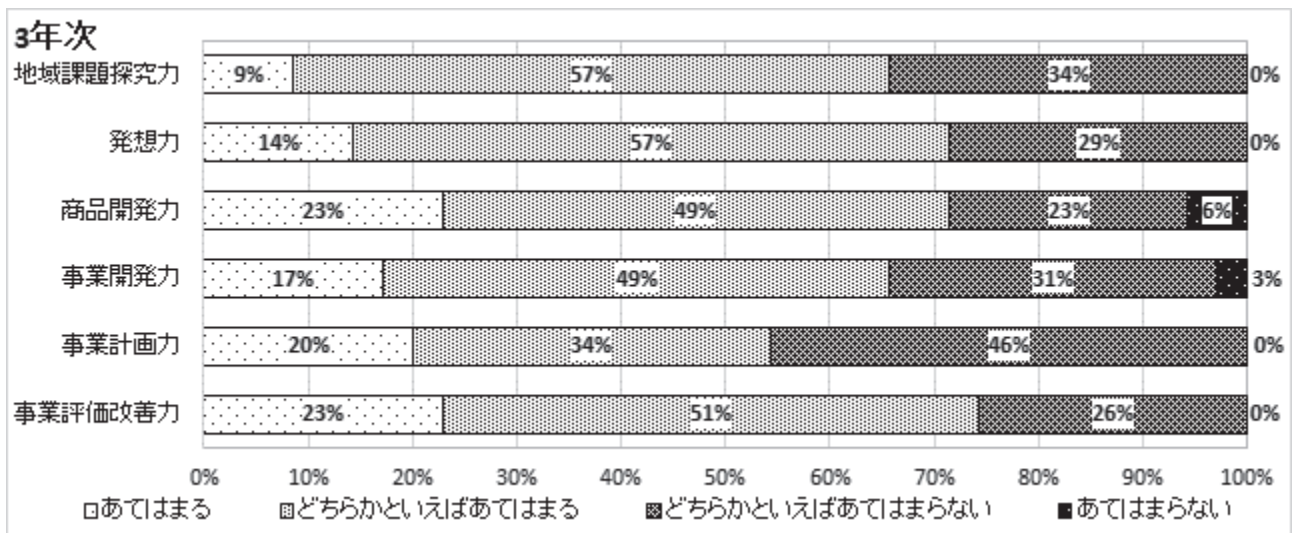
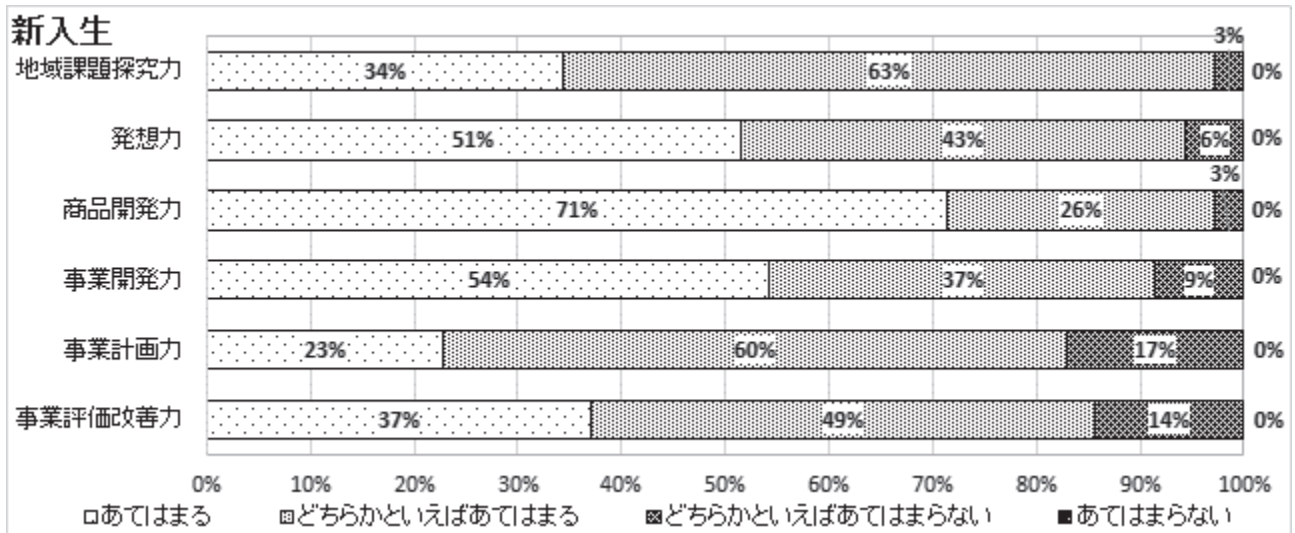
2.5. 地域協働マネジメント力の自己イメージ

地域協働学部の目標は、地域協働を組織するための能力である「地域協働マネジメント力」を身に付けた「地域協働型産業人材」の育成である。そして、地域協働マネジメント力を構成する能力として、第1年次では「地域理解力」、第2年次では「企画立案力」、第3年次では「協働実践力」をそれぞれ獲得するよう、段階的なカリキュラムを組んでいる⁴⁾。本調査では、これら3つの能力の要素となる各項目に関して、対象者の自己評価や関心を問う設問を設けている。このうち、地域理解力については問5、企画立案力については問6、協働実践力については7項目の文言を示し、それらに当てはまるかどうかを回答者にたずねている⁵⁾。これらの設問では3時点全てで同一の文言および選択肢が用いられているので、回答の時系列の変化を追うことで、学生が持つ自己認識の変化を捉えることができる。ただし、設問はあくまで回答者の主観をたずねており、客観的な能力評価ではない点に留意されたい。また、無回答については集計から除外している。

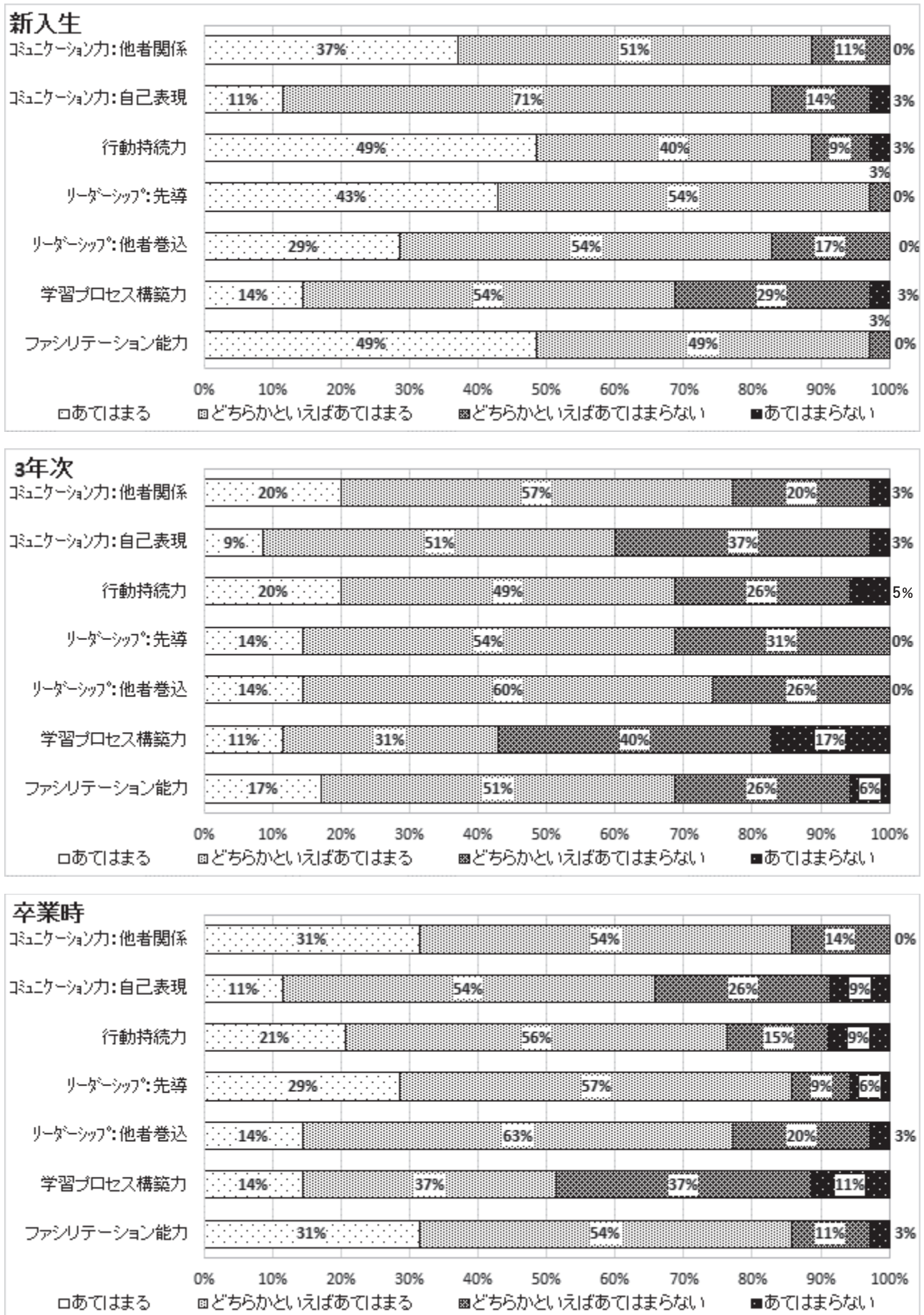
以下、地域理解力関連項目に対する回答の各時点の集計結果を第4図に、企画立案力関連項目のものを第5図に、協働実践力関連項目のものを第6図に示す。



第4図 地域理解力関連項目への回答(N=35)



第5図 企画立案力関連項目への回答(N=35)



第6図 協働実践力関連項目への回答(N=35)

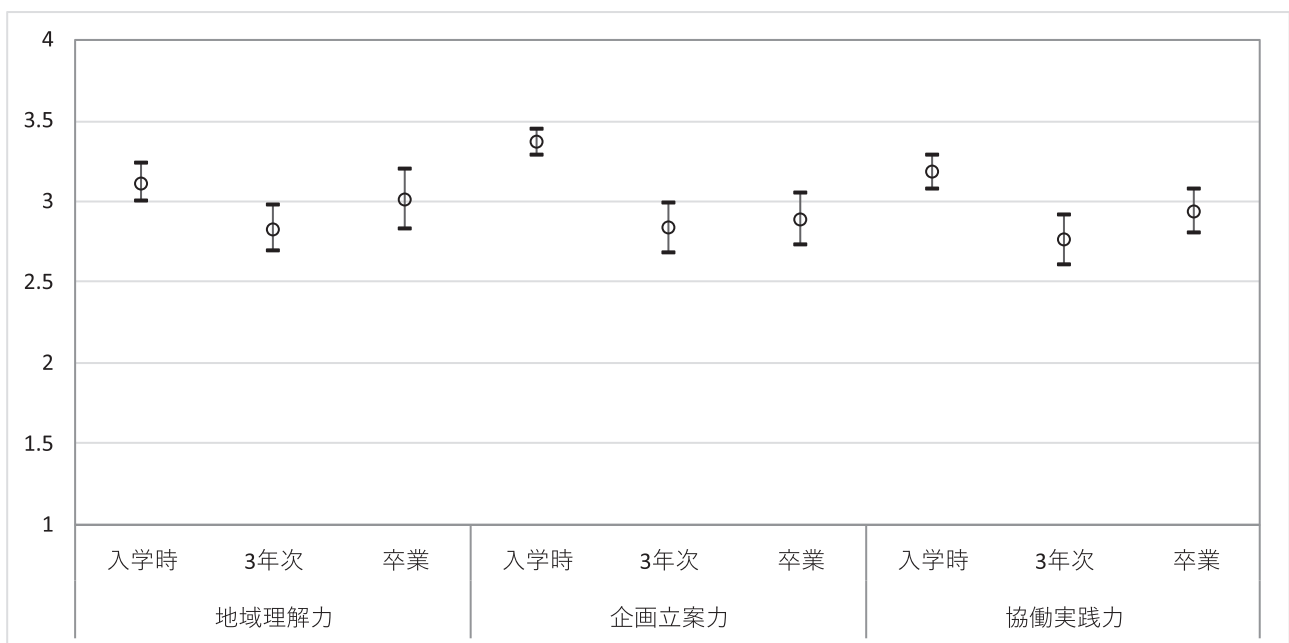
まず、地域理解力項目については、全ての項目で、入学時調査では少なかった「どちらかといえばあてはまらない」「あてはまらない」を合わせた否定的回答が3年次調査で増加しており、自己評価が入学時より低下していることが分かる。その後、卒業時調査ではいずれの項目も「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」を合わせた肯定的な回答の割合が高まっており、自己評価の改善が示されている。もっとも、いずれの項目でも、肯定的回答の割合は、入学時の水準までには戻っていない。

次に、第5図から企画立案力項目への回答について見ると、こちらも地域理解力の場合と同様の傾向がみられる。すなわち、全ての項目で3年次自己評価が入学時より低下しており、卒業時に持ち直しが見られるものの、いずれの項目も入学時の水準をいずれも回復できていない。特に、商品開発力項目（商品開発への関心をたずねる項目）に至っては3年次から卒業時にかけても肯定的回答が減少している。

協働実践力関連項目についても、地域理解力および企画立案力同様、全項目で3年次の自己評価が入学時より低下、卒業時に緩やかな回復のみを見せるという傾向を示している。ただし、コミュニケーションにおける他者への傾聴姿勢についてたずねる「コミュニケーション力：他者関係」に関しては、肯定的回答の回復が比較的顕著であり、卒業時調査での比率は入学時調査でのものと3%しか変わっていない。

ここまでは各設問項目別の集計結果を見てきたが、地域理解力・企画立案力・協働実践力それぞれをまとめた結果からも、先述の傾向はより鮮明となる。第7図は地域理解力・企画立案力・協働実践力それぞれについて、各項目の回答をスコア化した上で、平均値とその95%信頼区間を計算した結果を示したものである。結果の読み取りを容易にするため、自己評価が高いほどスコアが高くなるよう、ここでは「あてはまらない」を1点、「どちらかといえばあてはまらない」を2点、「どちらかといえばあてはまる」を3点、「あてはまる」を4点でスコア化している。また各項目の回答を合算したものを直接用いていないのは、第4図から第6図までも示されている通り、上記3つの能力に関する項目の数が異なるためである。

第7図から、3つの能力いずれに関しても、入学時から3年次にかけての低下、その後の回復の緩慢さがあらためて明らかになっている。特に、企画立案力については3年次から卒業時にかけてスコアがほとんど変化していない。一方で、これらの3つの能力のうち、入学時では企画立案力が他と比較して高くなっているものの、3年次および卒業時では能力間の差を見出すことは難しい。



第7図 地域協働マネジメント力自己イメージのスコア平均と95%信頼区間

以上から、学生が入学時に有していた強い肯定的な自己評価が学部教育前半にリセットされていること、その後の取り組みの中で自己評価が再び高まるものの、入学時ほどには及ばない点が、あらためて明らかになっている。ただし、本調査で対象となった第1期生は、後の入学者と比較して入学時の自己評価が特に強いことが明らかになっている⁶⁾。今回示された特徴が第2期生以降にも当てはまるかどうかは、今後の調査によって検証されなければならない。

2.6. 仕事選びの理想と現実のプライオリティ

入学時調査および3年次調査では、学生が仕事選びの際に何を重視したいかをたずねている。では、当時の理想は実際に就職活動を行う中でどう変化したのであろうか。特に、第1期生の就職先については学部内のみならず、高知県内の関心事ともなったものである⁷⁾。その点からも、学生の進路選択に関する意識を明らかにすることは意義を有する。

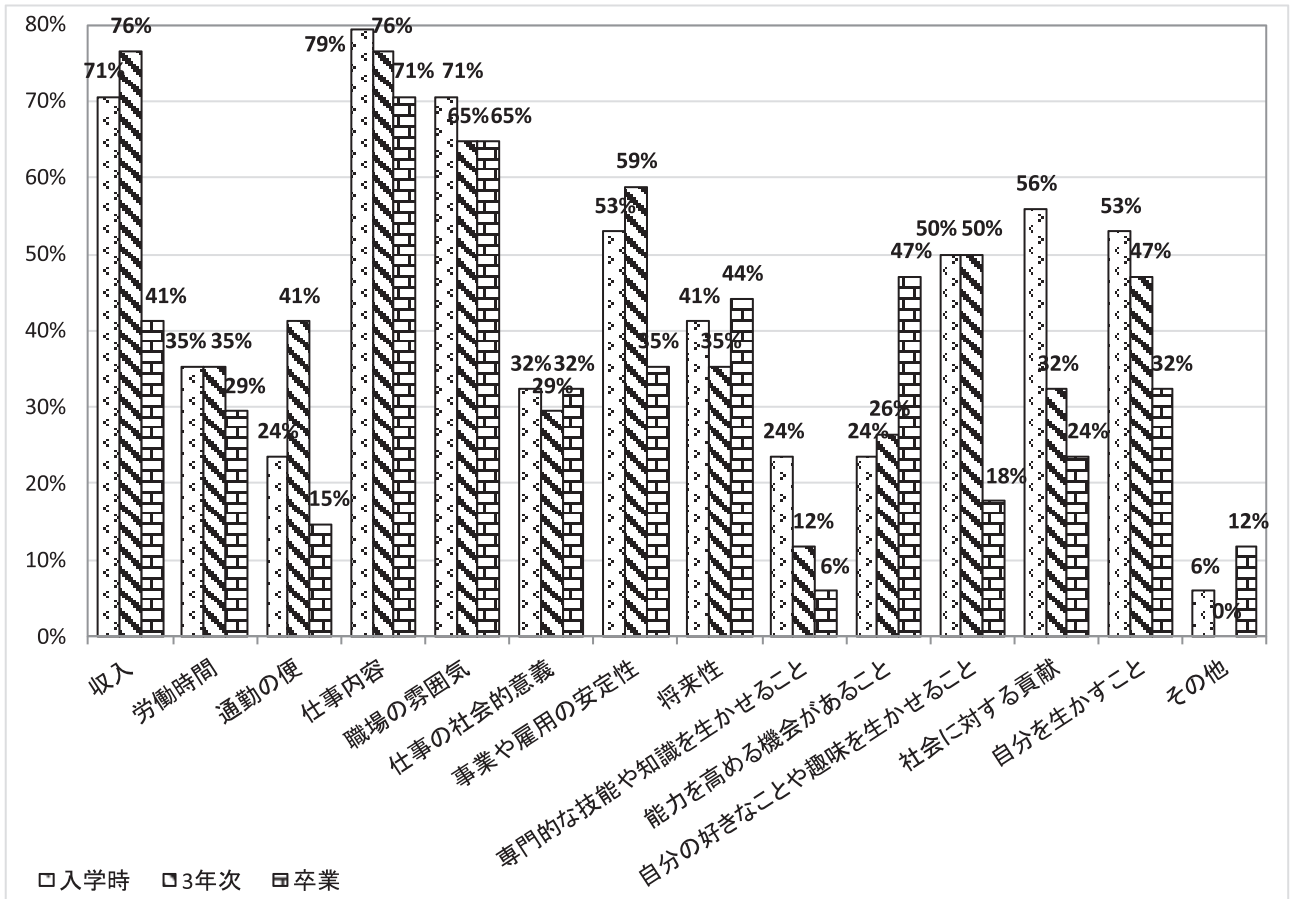
以上から、ここでは卒業時調査の結果をそれ以前のものと比較することで、第1期生による仕事選びの理想と現実について検討する。ただし、その前に参考資料として、卒業時調査回答者の進路について第3表に示しておく。回答者の大部分が企業に就職したことになるが、ここでは就職先の県内・県外の別についてたずねていない。企業就職者の中には県内就職者や、県外からの学生が地元に戻るケースも含まれている点には注意が必要である。企業就職者であるからといって、大都市圏への流出者とは限らないのである。

第3表 回答者の卒業後の進路（問8）

	N	%
企業	30	81.1%
公務員	4	10.8%
非営利団体、団体職員	1	2.7%
大学院進学	1	2.7%
その他	1	2.7%
自分で起業する	0	0.0%
家業のあとつぎ	0	0.0%
	37	100.0%

第8図には、入学時、第3学年進級時に仕事選びで重視したいと思っていたことと、実際の仕事選びで重視したこと（卒業時調査の設問項目）との比較結果が図示されている。ただし、就職活動をしなかったとの回答が1件あったため、こちらについては集計から除外している。したがって、第8図のみ集計対象となる回答者数が34名となっている。

第8図を見ると、入学時及び3年次には大多数となっていた収入を重視する回答は、卒業時調査では半数を下回っている。また、「自分の好きなことや趣味を生かせること」という回答も、入学時および3年次の結果にもかかわらず、仕事選びの段階ではほとんど重視されていない。このほか、「事業や雇用の安定性」「社会に対する貢献」「自分を生かすこと」についても、入学時の理想と実際の就職活動との違いが鮮明となっている。その反面、「仕事内容」「職場の雰囲気」については、仕事選びの理想のみならず、現実においても重視されている。さらに、「能力を高める機会があること」が卒業時に大きく増加している点も注目される⁸⁾。



第8図 仕事を選ぶ際に重視すること・実際に重視したこと

注：%は対回答者数(N=34)。回答件数は入学時 210、3年次 199、卒業時 160。

3. 分析

3.1. 地域協働マネジメント力自己イメージの変化と相関

前章では卒業時調査の集計結果を検討してきた。ここで、第1期生の意識についてさらに理解を深めるために、回答間の相関や、回答と学生の成績との関連について、簡単な分析を行うこととした。

まず、地域協働マネジメント力自己イメージに関する回答について、3時点での回答の相関、また同じ時点での能力間の相関を分析した結果を、第4表に示す。ここでは地域理解力・企画立案力・協働実践力それぞれの項目に対する回答を合算したものを分析している。

第4表 地域協働マネジメント力の相関分析

地域協働マネジメント力別								
地域理解力	入学時		企画立案力	入学時		協働実践力	入学時	
3年次	.447	3年次	3年次	.248	3年次	3年次	.275	3年次
卒業時	.125	.415	卒業時	.404	.303	卒業時	.392	.423
調査時点別								
入学時	地域理解力	3年次	地域理解力	卒業時	地域理解力	入学時	企画立案力	協働実践力
企画立案力	.503	企画立案力	企画立案力	.484	企画立案力	企画立案力	.584	企画立案力
協働実践力	.457	.376	協働実践力	.620	.718	協働実践力	.594	.738

まず異時点間の相関を見ると、地域理解力については入学時と卒業時の相関係数が例外的に低くなっている一方で、それ以外については正の相関があると言い得る。また、各時点での能力間の相関は、入学時の企画立案力と協働実践力との

ものを除き、異時点間の相関係数よりも全て高くなっている。特に、3年次および卒業時では、企画立案力と協働実践力との相関係数が突出して高い。総じて、ある時点で特定の能力について高い自己イメージを持ち得た学生は、他の時点および他の能力についても自己イメージを高めており、とりわけ企画立案において高い自己評価を持ち得た学生は、実践面でも自信を深めることができていると言い得る。

3.2. 学生生活への満足度および自己イメージと成績の関連

続いて、学生生活への満足度が地域協働マネジメント力の自己イメージや学業成績の向上につながっているのかどうかを検証する。

第5表は学生生活満足度の各項目と、地域協働マネジメント力自己イメージの平均値の相関係数をまとめたものである。相関係数は高低まちまちであり、中にはマイナスのものもあるため、満足度平均との相関は3年次・卒業時とも弱く、全体的な傾向は見出しがたい。ただ、その中で注目されるのが、「教員との関わり方」との相関の強さである。特に卒業時には、相関係数の絶対値はいずれも他のものを上回っており、教員との関係性が自己イメージの向上に重要な役割を果たしていることが分かる。また、授業満足度は地域理解力との間のみ正の相関が強い。反面、クラブ・サークルへの満足度と卒業時の自己イメージの間では相関係数がいずれも負となっている。2.2.ではクラブ・サークルに打ち込む学生の存在が見られたが、学部本来の目的である地域協働マネジメント力の育成との両立という点では、課題が残ったことが示唆される。

第5表 学生生活満足度と地域協働マネジメント力自己イメージの相関係数

3年次			卒業時				
	地域理解力	企画立案力	協働実践力		地域理解力	企画立案力	協働実践力
授業	.372	.051	.042	授業	.523	-.088	-.179
友人関係	.010	.017	.121	友人関係	-.058	-.088	.224
クラブ・サークル	-.043	.249	.088	クラブ・サークル	-.318	-.264	-.179
教員との関わり方	.243	.123	.331	教員との関わり方	.568	.547	.437
アルバイト	.023	.012	-.137	アルバイト	-.185	-.261	.066
満足度平均	.204	.145	.130	満足度平均	-.010	.167	.075

注：太字は絶対値が.3以上の相関係数、斜字はマイナスの相関係数を表す。

続いて、第6表は学業成績の指標として卒業時GPAを用い、学生生活満足度および地域協働マネジメント力の自己イメージとの相関を分析した結果を示している。ここでも相関係数は項目によって変動しているが、学生満足度の中では授業、さらに第5表と同様、教員との関わり方との相関係数が高い点が注目される。

第6表 卒業時GPAと学生生活満足度および地域協働マネジメント力自己イメージとの相関

学生生活満足度	r	地域理解力	r	企画立案力	r	協働実践力	r
授業	.454	状況把握力	.379	地域課題探究力	.540	コミュニケーション力:他者関係	.147
友人関係	.299	共感力	.268	発想力	-.008	コミュニケーション力:自己表現	.318
クラブ・サークル	.018	情報収集・分析力	.128	商品開発力	.365	行動持続力	.038
教員との関わり方	.458	関係性理解力	.356	事業開発力	-.136	リーダーシップ:先導	.496
アルバイト	-.005	論理的思考力	.263	事業計画力	.339	リーダーシップ:他者巻込	.338
満足度平均	.453	地域理解力平均	.380	事業評価改善力	.319	学習プロセス構築力	.422
				企画立案力平均	.328	ファシリテーション能力	.202
						協働実践力平均	.580

注：太字は絶対値が.3以上の相関係数、斜字はマイナスの相関係数を表す。

さらに、地域協働マネジメント力について見ると、身近な地域の課題発見と課題への取り組みに関する「地域課題探求力」において、相関係数が最も高い。以下、集団において率先して行動できるかどうかをたずねる「リーダーシップ:先

導」授業時間外の計画的な学習習慣に関する「学習プロセス構築力」の順で、相関係数が高くなっている。これらの存在もあつてか、GPA と地域理解力・企画立案力・協働実践力それぞれの平均との相関を見ると、協働実践力との係数が突出して高くなっており、注目に値する。

4. 考察

ここまで、卒業時調査を主として、集計結果および簡単な分析結果を報告してきた。ここでは、以上の結果から示唆されることについても考察しておきたい。

まず、2.および3.で見てきた調査結果の要点としては、以下の5つが挙げられる。

- (1) 第1期生は入学時には学びの内容、カリキュラム、学生生活に期待していたが、卒業時には学生生活、就職結果に充実を感じている。
- (2) 地域協働マネジメント力項目に関する自己評価・関心は、総じて入学時が最も高い。その後、第3年次で低下し、卒業時には再び上昇するものの、入学時の水準には回復していない。
- (3) 学生の力の入れ方、科目に対する充実感とも、実習科目が研究科目を大きく上回っている。
- (4) 教員との関係との満足度が、地域協働マネジメント力項目の回答との間で特に強い正の相関を有している。
- (5) 卒業時点での GPA は、授業および教員との関わり方への満足度との間で特に強い正の相関を有している。また、地域協働マネジメント力の自己イメージの中では、特に協働実践力との間で、正の相関が強い。

まず焦点となるのが、(1)(2)をどう評価するかである。これについては、本学部が学生の期待した学びを提供できていない、あるいは自己肯定感を下げているとの否定的評価があり得る。ただその反面、そのような評価に対しては反論も可能である。まず、そもそも学生の求めに応じることが学部教育の趣旨なのかという疑問が生じる。むしろ、学部がカリキュラム・ポリシーを定めている以上、学生の求めとは異なつたとしても、それを堅持することには正当性がある。加えて、自身への省察の過程で自己評価が下がるのは十分あり得るのではないかとの考え方もあろう。

本稿では紙幅の制約もあるため、これらの意見の当否については、あえて判断は避ける。しかしながら、3年次から卒業時の評価上昇がみられない点は無視できない。学生が自らの学びの実感を高められる方法を検討する必要があるだろう。

次に、(3)について、研究科目の比重の低さを問題視すべきものと考えられる。研究科目は先述の通り「知の統合」であり、本来ならば実習と並ぶ学部教育の柱となるべきものであるが、それとは程遠い状況を調査結果は明らかにしている。この結果は、研究の位置づけについて再考の必要があることを示すものと考えらるべきであろう。その際、研究科目のてこ入れを図るか、逆に縮小して実習科目を完全に中心に据えて研究を縮小するという双方の可能性があり、そのどちらの方向に進むのか、学部としての姿勢を明確にする必要がある。

続く(4)と(5)は、教員の存在が学生にポジティブな影響を与えられることを実証したものと言えよう。それだけに、本学部教員には学生とのより良い関係構築や、教員としての魅力向上、授業のさらなる改善に努めることが求められる。さらに、(5)で示した協働実践力は3年次に獲得を目指す能力であるが、3年次以降に取得する単位数が1年次・2年次のものよりも少ないことが一般的であろうことから、協働実践力を得た実感が良好な成績につながる面も考えられる一方で、逆の因果関係、すなわち、2年次までの成績が3年次の学びに対する実感に影響する面も小さくないものと考えられる。これと先述した地域協働マネジメント力自己イメージの回復の鈍さを合わせて考えると、1年次や2年次において、学生の学業面でのつまずきをどう防ぐかが課題となる。

5. まとめ

本稿では、本学部初めての卒業生である第1期生に対して行った3時点での調査の結果のうち、特に卒業生調査の結果を中心に検討してきた。そうすることで、第1期生に見られる特徴として、(1)入学時には学びの内容やカリキュラム、学生生活に期待し、学生生活、就職結果に充実を感じて卒業していく、(2)地域協働マネジメント力項目に関する自己イメ

ージは入学時から第3年次で低下し、卒業時にわずかにしか改善していない、(3)学生の力の入れ方、科目に対する充実感とも、実習科目が研究科目を大きく上回っている、(4)教員との関係との満足度が、地域協働マネジメント力項目の回答との間で特に強い正の相関を有する、(5)卒業時のGPAは、授業および教員との関わり方への満足度、地域協働マネジメント力の自己イメージのうち一部の項目との間で正の相関が強いという5点が明らかとなった。

ただし、言うまでもないことではあるが、今回示された結果はあくまで第1期生のみのものである。本学部の学生の傾向や特徴、さらにはその変化を理解するためには、第2期生以降に対しても調査を継続しなければならない。

その際の課題として、ここでは2点を挙げておきたい。第1に、卒業生調査の回答率向上である。今回は卒業前のオリエンテーションの機会に調査を実施したが、集まりが十分ではなかったため、事前の告知をより早めに、また学生により確実に伝わるよう工夫する必要がある。ただし、卒業後の新生活の準備に追われる学生の中には、オリエンテーション等を設けても参加が困難なものも少なくない。全員がほぼ確実に集合する機会は卒業式であるが、式当日の調査実施は、現実的な選択肢とは言い難い。調査の実施方法についても検討の余地があろう。

第2に、設問項目についても検討を要する。繰り返しになるが、この調査でたずねているのは地域協働マネジメント力に関する学生の自己評価や関心であり、能力そのものとは異なる。したがって、何らかの形で能力についてもたずねることが望ましくはある。とはいえ、異なる年度の学生の間で比較可能性を担保するには、設問を継続してたずねる必要があり、安易な設問変更は避けなければならない。この点はまさにジレンマであり、簡単な解決が存在するとは考えられないが、学生の成長を捉えるという観点からも、引き続き検討を重ねていきたい。

注

- 1) 入学時調査のうち、2015年度入学生(第1期生)については湊邦生、玉里恵美子、辻田宏、中澤純治「地域協働教育への学生の意識～高知大学地域協働学部第1期生調査の結果から」『高知大学教育研究論集』20、25-33(2016年)を参照。以下、2016年度(第2期生)については湊邦生、玉里恵美子、辻田宏「地域協働教育に対する学生の意識の動向～高知大学地域協働学部第2期生・第1期生調査の比較～」『高知大学教育研究論集』21、1-12(2017年)、2017年度(第3期生)は湊邦生、玉里恵美子、辻田宏『「地域協働」を志望する学生像—高知大学地域協働学部新入生アンケートに対する第1期・第2期・第3期学生の回答結果からの検討—』『Collaboration: 高知大学教育研究部総合科学系地域協働教育学部門研究論集』8、73-84(2018年a)、2018年度(第4期生)に関しては湊邦生、玉里恵美子、辻田宏「地域協働教育への学生の意識: 2015-2018年度高知大学地域協働学部新入生調査の結果から」『高知大学教育研究論集』23、57-69(2018年b)をそれぞれ参照。
- 2) 湊邦生、玉里恵美子、辻田宏、中澤純治(2016)を参照。
- 3) 3時点いずれの調査においても、選択項目の個数と内容は同じである。ただし、例えば入学時調査及び3年次調査では「学びたい内容を学べる」となっている選択肢が、卒業時調査では「学びたい内容を学べた」となっているように、調査時点で回答者に違和感を与えないように変更を加えている。
- 4) 国立大学法人高知大学地域協働学部ウェブサイト、URL: <http://www.kochi-u.ac.jp/rc/>(2019年10月30日最終アクセス)。
- 5) 本稿では各項目の設問文について掲載する余地がなかった。それら設問文および、自己評価に対応する設問項目群とそれらを設定した理由については湊・玉里・辻田・中澤(2016)を参照。
- 6) 湊邦生、玉里恵美子、辻田宏(2017年、2018年a、2018年b)に示された各年度入学生との比較結果を参照。
- 7) 高知新聞ウェブサイト「地域協働学部の進路は普通? 高知大1期生の7割県外、市町村役場ゼロ Uターンで地元貢献か」2019年2月5日掲載、URL: <https://www.kochinews.co.jp/article/251480/>(2019年10月30日最終アクセス)。
- 8) 卒業時調査では、最後の設問として在校生に向けたメッセージを自由記述で記入するよう求めるものを設けていたが、形式上集計になじまないこと、あくまで在校生向けという設問の趣旨から、本稿では扱わない。

令和元年 (2019) 11月11日受理

令和元年 (2019) 12月31日発行